

「練習」の教育学的意義に関する一考察 —青年期における「新たな時間」への関係性について—

有馬 知江美¹

1. はじめに

「かつては私たちの世界には、今日よりもっと多様な時間世界があった」¹と、近代的な時間秩序によってつき崩される前の世界に「さまざまな時間」が存在していたことを内山節（1950-）は指摘している。近代化とは時間秩序を統一していくことであると考えられる内山によれば、それによって「それぞれの時間とともにあった、かつての人間たちの存在のかたちも消失していった」²のである。

なお、このことは、「神話的時間」³に生きる乳幼児期から、就学を経て「近代的時間」に移行する児童期以降の子ども達の姿に重なるものであるといっても過言ではない。すなわち、遊戯に内在する多様な経験に基づいた幼児期から、時間秩序を基盤とする小学校生活に移行することにより、彼らもまた、「さまざまな時間」の世界から「近代的時間」の世界を生きることとなるのである。内山は「時間を客観的秩序として統一することによって、人間の存在を平準化させ、その支配下においた近代以降の私たちの社会をとらえながら、時間の解放を軸にする人間の解放を視野に収める」⁴ことを著書においてめざしたという。こうした「時間の解放を軸にする人間の解放」をめぐる、児童期以降の学び手の時間世界についても、

¹白鷗大学教育学部
e-mail : arima@fc.hakuoh.ac.jp

「さまざまな時間」を彼らを取り戻すことの必要性を感じるのである。

そこで、本稿では、児童・生徒及び学生等の学び手が関わる「さまざまな時間」のうち、教育学者であるボルノー（Otto Friedrich Bollnow：1903－1991）による「練習」⁵（Übung）概念に見出すことのできる時間を取り上げることとした。「練習」は、持続的な反復という時間性を内在させており、こうした「練習」の過程で人が忘我的に対象世界に沈着するという、まさに「時間の解放を軸にする人間の解放」ともいうべき独特の時間性をそこに見出すことができる。なお、彼によれば、「練習」とは、人間存在が真の本質へと戻るために生涯にわたり不可欠なものである。そこで、本稿では、彼の著書である『練習の精神：教授法上の基本的経験への再考』（Vom Geist des Übens, Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrungen.）（以下、『練習の精神』とする。）における「練習」概念を援用しつつ、人が「さまざまな時間」を獲得することの教育的価値を明らかにする端緒を得ることとする。

2. 教育における「練習」の復権の意義

ボルノーは、人間形成における「練習」の意義について「人間は練習によって、ただ練習によってのみ、その生活の完全な発展と充実に至る」⁶と述べ、その成果を求めるための手段というよりはむしろ、それ自体が目的であるものとして「練習」を捉え、人間形成において生涯にわたり不可欠であることを示している。

その際に、「練習」は哲学的人間学においてこれまでほとんど注目されて来なかった⁷概念であり、さらに、「学校やその他の教育分野では下位のかなり軽蔑された役割」⁸をこの概念が担っていると、20世紀初頭の改革教育学（Reformpädagogik）をはじめとして教育学が「練習」を軽視していることを自覚的に語っている。「練習」とは、「繰り返しとして、既に行われたことを繰り返すことになるため本質的に非生産的」⁹なものであり、また、「子どもの中の芸術家」という言い回しを肯定的に用いる改革

教育学においては特に、「練習」に内在する固定的な習慣が子ども達の内面から湧き出る創造性を阻止するという点で、彼らの生動性に対して「退屈」をひきおこす要因として嫌悪されているというのである。

これに対してボルノーは、子ども達の自発的活動を重視する改革教育学が「練習」を嫌悪したことは、彼らの諸活動に「放漫」¹⁰を誘発したと指摘している。反復性等に基づく「練習」の忌避により、子ども達は「規律のないディレッタンティズム」¹¹に陥ってしまったというのである。こうして、子ども達に退屈さをもたらす無味乾燥な鍛錬と位置づけられた「練習」への嫌悪は、一方では、丹念に一つの事柄を探究し続けようとする忍耐力等を始めとした諸能力を彼らから奪い取ったといっても過言ではないのである。子どもの創造性を阻害するものとしての「練習」への嫌悪は、一方で、創造の基盤となる子ども達の諸能力を枯渇させたというアンビバレントな様相を呈したということになる。

なお、ここでボルノーが、改革教育学の潮流においても、こうした「練習」の不在を危惧する者がいると、教育における「手仕事の技能の習得」¹²の必要性を強調したケルシェンシュタイナー（Georg Kerschensteiner：1854－1932）を挙げていることは看過できない点である。すなわち、「練習」は個々人の自由を阻害するものではなく、むしろ、精確な形成を促す厳密な尺度を伴ったものであるという点で、各人の創造力の原動力となるのである。したがって、「練習」は「人間が自己の努力によって内的自由に到達できる唯一の方法」¹³として、その復権が哲学的人間学の立場からも求められるものであることをボルノーは指摘するのである。

3. 生涯学習としての「練習」

一般的に「練習」とは、学校教育における未成年者の要件であると考えられる傾向にある。これに対し、ボルノーは、「練習」は幼少期から高齢に至るまで生涯にわたり不可欠なものであると捉えている。ともすれば「練習」を忌避し、怠惰になりゆく一般的な人々の傾向に対して、彼は、

「練習」としての日々のスケッチを通じて創造的な描画に至る画家のセザンヌ（Paul Cézanne：1839－1906）を例に挙げながら、毎朝、習慣的に何かを「練習」することを私達に推奨している。換言すれば、「練習」とは「幼児期から老年期に至るまで生涯にわたり本質的に人間の一部であり、人間は継続的な練習を通じてのみ自分自身の本質を満たすことができる」¹⁴のであり、より深い人間学的意義を携えている。

ここで、「練習」が生涯にわたり不可欠であるとする根拠として、「人間は練習するときのみ、完全に人間である」¹⁵というシラー（Johann Christoph Friedrich von Schiller：1759－1805）に依拠した命題が引き合いに出されていることも見逃せない点である。すなわち、人間の生は元来、死を迎える瞬間に至るまでよりよさを探究し続けながらも、未完のまままで終焉を迎えることとなる。人が生における本質を探究する限りにおいては、「練習」もまた終焉には至らないのであり、「人間はその本質を練習者としてのみ満たす」¹⁶のである。したがって、「練習」とは学校教育段階に留まるものではなく、生涯学習として捉え得る概念なのである。

さて、こうした生涯にわたる絶えざる「練習」の意義を捉えた上で、私達には改めて学校教育段階における「練習」を考察することが求められるのである。そこで、ボルノーが幼児教育と就学後の教育を幾分分別するような視点を持ちながら、「練習」の意義を第一義的に幼児教育に見出している点に注目してみたい。具体的には、モンテッソーリ（Maria Montessori：1870－1952）やフレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel：1782－1852）がそれぞれの幼児教育実践において「練習」を重視していた姿への言及である。

モンテッソーリに関しては、彼女の「教具（Material）」の指導法をめぐる多くの誤解が生じていることを、ボルノーは「練習」の視点から指摘している。一見すると子ども達の遊びの自由を保障していないかのように見えるその指導法をめぐる、教具使用に我を忘れて没頭する子ども達の様子やそれに伴う保育環境の静謐及び練習の過程で表出する彼らの根本的な

変化等をモンテッソーリが丁寧に捉えている様相をボルノーは評価しているのである。彼女の教具の目的は子ども達の生活習慣や学習面を多面的に訓練することであるが、多種多様に考案された教具の使用を通して、元来、注意散漫であった子ども達が、「我意の沈黙」と「人々に語りかける静かな声に耳を傾け従う開放性」¹⁷に至るというのである。換言すれば、手の技能の「練習」を通して子ども達が「真の生活」を経験しようと、ボルノーは彼女の幼児教育に意義を見出しているのである。

さらに、彼は、フレーベルの恩物を用いた指導法にも「練習」の要素を見出してその意義に注目している。すなわち、「第三恩物」を用いた「美の形式」における子ども達への指導が厳格な規則性を伴ってなされる際に、ここでもまた彼らが集中的な没頭を示すのである。

こうして、モンテッソーリやフレーベルによる指導法に照らしながら、幼児教育における「練習」に意義を認めたボルノーであるが、これらの指導法が身体的熟練の養成に特化していることから、就学後の体系的な教授法全般にすべてを援用することはできないと彼は考えている。しかしながら、上記の幼児教育実践に現れているように、生涯学習としての「練習」の端緒を幼児期に認め、また、子どもの恣意的な教材使用を阻止し、厳密な指導法に基づく「練習」を幼児教育で意識的に扱うことにも一考の余地があることをここで確認しておきたいのである。

ところで、子どもの遊びやスポーツでの競技及び楽器演奏に至るまでの様々な形式の'Spiel'（遊び、競技、演奏）には、「同一の出来事がいつでも初めからやり直して新しく実行」¹⁸するという反復可能性が内在しており、ボルノーはそれらに「練習」の側面を見出している。ただし、このうち「遊び」に関しては、それを本来的な意味での「練習」と位置づけるには限界があると考えているようである。すなわち、「練習」とは、「遂行が完璧にやり遂げるまで決して諦めない絶え間ない真剣さ」¹⁹のうちでなされるものなのであり、しかも、「遊びの連続的な流れを中断し、全体の連関から切り離され、それ自体としては意味のない個別的遂行に取り

組んで、それが実際に「熟練」するまで、これを繰り返さなければならない²⁰と遊びに内在する諸経験の融合性を一旦個別化し、個別の経験を完遂することに「練習」の意義が見出されるからである。「練習」をめぐるこうした厳格性に照らせば、子どもの遊びはあくまでも擬似的な練習にすぎないとの解釈が成り立つのである。

こうしたボルノーの考え方に対して、乳幼児期を中心とする子どもの遊びの中にこそ、爾後、「練習」に意欲的に取り組もうとする態度を形成する時間性が内在していると、それを全面的に支持することもできるであろう。つまり、彼らの遊びには、同じように見える事象を繰り返し楽しむ「反復性」という時間性のみならず、遊びへの遊戯者の意志の現れである「永遠性」や遊びの展開性を保障する「超越性」といった多様な時間性が内包されていることに留意したいのである²¹。彼らがこうした「さまざまな時間」を幼児期の遊びを通して経験することにより、生涯にわたり求められる「練習」に伴う時間性に対しても、それを拒絶することなく主体的に引き受けようとする態度形成の一助となることが考えられるのである。

ここから、「練習」をめぐり、乳幼児期の子ども達には、モンテッソーリやフレーベル等の指導法に見られるように、保育者が準備した教材やその使用法に従う「練習」が要請されると同時に、遊びを通してそれ自体に内在する「さまざまな時間」を十分に経験することも極めて重要なのである。すなわち、遊びを通した総合的な指導がなされる幼児教育において、子ども達に対する遊びの自由の保障と同時に、保育者による遊びの規定もまた不可欠なのであり、こうした遊びをめぐる両義性についての再考が求められるのである。

4. 「練習」をめぐる独特の時間

ところで、モンテッソーリらによる幼児教育実践にも見られたように、「練習」の過程で練習者（Übender）が示す「没頭」には、日常生活には現れにくい独特の時間性を見出すことができる。ボルノーはそれを「忘我

的な没頭」(die selbstvergessene Hingabe)²²という語で示し、練習者が「練習」に没頭する際に「自己忘却的」な「高揚」を通して「正しい内的状態や内的自由や放下」²³に至ることを指摘している。

ここで言われる「放下」²⁴(Gelassenheit)とは、「人間が我意を放下し(gelassen)、正しい方法で時間に適応する」²⁵と彼が述べるように、いかなる時間の流れにも心を乱されず、自分自身に安らう状態としての落ち着いた静謐な状態を意味している。なお、そうした状態とは、練習者が時間と正しく関係する際にもたらされるものであることを彼は随所で述べている。すなわち、「人間が時間と調和して生きる時、何物によってもせき立てられていないと感じ、同時に自己を追い込まず、瞬間において安らぎ、時の流れに身を任せる場合に、彼は自由だと感じる」²⁶と「放下」の状態が人間の内的自由と関連していることを明らかにしているのである。

ここで、「練習」において人間が時間と「同調して生きる」²⁷ような時間への関わり方が問われていることに留意したい。たとえば、彼は、「行為を可能な限り良くし、そして繰り返す度に前回よりも良くなるようにという揺るぎない意欲」に基づく「全身全霊をあげての緊張」と、過大な緊張からの「開放」とが結びつく²⁸ことによって、練習者に「放下」の状態がもたらされると説明している。一方では、人が「時間厳守」(Pünktlichkeit)²⁹を自分に課すと同時に、「時間の余裕」もまた必要であることを示しながら、特に後者に関して、「あわてて先を急いだり、だらだらと時間の背後に立ち遅れたりすることなく、自分の個人的なテンポを時間に適合させる」という「性急さ」(Hast)と「怠惰」(Säumigkeit)との間の正しい態度³⁰を人が保つ際、「放下」の状態が現れ出ると考える。さらに、時間への態度として、「時間をとどまらせること」と、それを「支配すること」及びあらゆる個々の仕事に「それぞれに適切な間をとらせること」が重要であると語ってもいる³¹。練習者の心的状態として日常の焦燥に追い回されていたり、深刻な苦悩に圧迫されていたりする限りにおいてはこうした「放下」には至らないと、時間との関係性が引き起こす精神

的な側面にまで彼が言及していることも興味深いのである。

ともすれば「近代的時間」に依拠する人々は上記のような二極的な時間の中で生きようとする。これに対して、行為の反復性と持続性を特性として持つ「練習」は、「近代的時間」を超越した独特の時間性を内在させていると解釈することができる。「近代的時間」における時間の二極化の狭間に人間学的な意義を持つ時間性があることをボルノーは発見したといっても過言ではないだろう。なおそれは、決して「近代的時間」に根差した公共性を否定するものではない。むしろ、「冷静かつ着実に自分の課題に取り組み、自分の仕事を可能な最高の完成度に導き、そして注意を集中し努力して自分の能力と遂行を向上させる」ような「練習」において、「正しい方法で責任を持って生きる人生を決意すること」³²を伴う「放下」の意義を、ボルノーは示しているのである。

5. 青年期の教育における「練習」を通じた「新たな時間」の経験

本稿ではすでに、「練習」の端緒を生涯学習の基礎を培う幼児教育に確認したが、一方で、就学後の教育全般にそれを全面的に援用できるわけではないとのボルノーに依拠するならば、各学校教育段階における「練習」のあり方の検討が求められる。なおその際に、彼が「練習」とは、知識ではなくむしろ「能力」の領域において扱われるべきである³³と考えるように、実質陶冶と形式陶冶のうちいかなる陶冶を中心とした考察が要請されるのかも問題となるであろう。

既述の通り、本稿では、就学後の学び手の時間世界をめぐり、「さまざまな時間」を彼らが経験することの意義を問うものである。そうした「さまざまな時間」への関わりは、幼児期に遊びを通して多様な経験がなされることにより子ども達に自然に促されることから、筆者はこれまでに就学前の子ども達が過ごす「子どもの時間」に人間学的な意義を見出してきた。すなわち、彼らの生活の中心を占める遊戯に内在する独特の時間性が、直

観を通して世界を豊かに捉える力を彼らに醸成するという点で、人間形成において「子どもの時間」が不可欠であることを拙稿で論じている³⁴。

もともと、子ども達が公共性を獲得しながら成長することの意義を考える上で、彼らの時間世界が、多様な経験に基づく「子どもの時間」から、「学校の時間」である「大人の時間」に漸次移行することも不可欠である。こうした移行は子ども達の就学を機になされるのであるが、時間割や授業時間等を基盤とした「学校の時間」を日常生活の中心に据えることにより、彼らの身体にはそれが深く浸透していくのである。換言すれば、子ども達は、幼児期の「神話的時間」から、近代の所産である学校での生活を通して「近代的時間」を中心に生きることとなるのである。なお、児童期以降の学校生活が長期化すればするほど、合理的で効率的な価値に根差した「近代的時間」が盤石なものになるが故に、「さまざまな時間」への柔軟で豊かな関わり方が希薄化されていくことが懸念されるのである。

以上を踏まえながら、就学後の子ども達が、時間への新たな関わりをなすことの意義について、今後論考していくことが不可欠であるが、本稿では、学校教育の最終段階に位置づけられる青年期の教育における「練習」の意義について問うこととする。

青年期の者達は、学齢期に達した就学以降、日々の学校生活を長期にわたり過ごしており、「近代的時間」がその身体に深く浸透している。また、青年期のうち特に高等教育機関に在籍する大学生は、高等学校卒業後に社会人となった知己も多く、そこから得られる情報を通して人生設計への現実的なまなざしも併せ持っている。また他方では、そうした現実性との対峙において、自分自身の未来の可能性に対する希望も脆弱なものとなったり、すでに諦念を抱いていたりする場合も多い。こうして、日常生活において合理性や効率性に基づく「近代的時間」に生きる者達にとって、その時間世界は閉塞的なものとなりやすいのである。ここから、彼らにとって「練習」を通した「新たな時間」の獲得が、世界への新たな関わり方をもたらす契機となるということが考えられるのである。

以上のような観点から、筆者はこれまでに、大学生を対象とした教育活動等³⁵において、日常生活では得られにくい「新たな時間」を彼らが経験する機会を提供し、彼らの世界への関わり方の変容を捉えてきた。具体的には、彼らが日常生活においてその関係性が希薄な芸術文化に触れる経験を木彫人形制作を通して促してきたのであるが、「彫刻」を伴うそうした制作過程において「放下」を中心とした新たな時間性の獲得を自覚する姿を確認している。

彼らの多くは保育者及び教師を目指している。「人間は練習を通して正しい内的状態や内的自由や放下を見出した後に、責任を持って彼の課題を果たすために行動的生活へと戻ることが重要」³⁶と、「練習」とその後の社会的責任を伴った行動化の関係性をボルノーが述べるように、木彫人形制作過程において「放下」の状態を経て世界に対する視点を変容させた者達が、爾後、そこで獲得した視点を保育や教育に還元したいと一様に語る姿には、「練習」の人間学的意義が具現化されているとあってよい。

なお、この教育活動における制作物として小さな木彫人形を適切なものと位置づける理由は、今から100年ほど前の大正8年に芸術家の山本鼎（明治15年－昭和21年）により提唱された農民美術運動に由来する。すなわち、大正期の農村青年達が、掌にのるほどの小さな風俗人形である「木片人形」等を制作・販売し、農村経済の活性化のみならず彼らの美的趣味を涵養することを目的とした同運動において、多くの青年達はその制作に没頭した史実には、「練習」の人間学的意義を見出すことが可能と思われるのである。農業文化に生きていた農村青年達が「農業の時間」に加え、「芸術の時間」という「新たな時間」を付与されたことにより、農業では得られなかった「放下」に至った姿が随所で確認されている。木彫人形の制作は、彼らに農民であることの自己存在の肯定と、人間の身体性と生に対する気づきをもたらし、彼らに精神陶冶がなされたと解釈することができる³⁷。

社会教育の範疇として位置づけられる農民美術運動におけるこうした青

年達の様態に重なるかのように、現代社会の学校教育の範疇においても木彫人形を制作する過程で青年達が同様に「放下」の状態を示す様は注目すべき点である。ボルノーは「練習」の方法として、特に芸術的な創造に意義を見出しているが、その普遍性を新旧の青年達の姿に確認することができるのである。

以上のような新たな時間性の獲得と世界への新たな関わり方が彼らにもたらされる要因の一つは、その対象が木彫の人形であることに由来すると考えられる。すなわち、彫刻刀の無数の反復性を必要とする彫刻という行為と、疑似的な人間としてそこにいのちが宿る人形の表現が、制作者である青年達に、誠実にいのちに向き合おうとする「練習」の機会を与え、対象世界に沈着することを促すのである。

6. 「新たな時間」をめぐる現代の青年達の様態

木彫人形制作における彫刻を通した「練習」がいかなる「放下」を現代社会の青年達にもたらすのかを概観してみたい。なお、筆者の教育活動においては、高さ10cmほどの木彫人形である「こっぱ人形」と人形劇用片手遣い人形「ギニョール」³⁸を制作する機会を約200名の学生達に与えてきた。いずれも木を素材とした木彫人形のジャンルにあるものであり、学生達はその制作過程における多くの時間を彫刻に費やしている。彫刻の他には、「こっぱ人形」制作では彩色の工程があり、また、「ギニョール」制作では彩色及び衣装制作の工程があるが、本稿では特に「練習」の要素を見出しやすい彫刻の工程に言及している。

さて、木彫人形を完成させることに要する十数時間において、学生達は一樣に、「落ち着いて集中することができた」、「人形と一対一で向き合う感覚を得ることができた」等、通常の活動では得られない新たな時間感覚を自分が獲得したことを確認しつつ、その過程で、「放下」の状態を経験したことに驚嘆する事例が多い。彫刻刀の反復的な動きを伴いながら、見本を模刻しつつ望ましい形態を追求し続ける彼らの姿には、「練習」をめ

ぐる「忘我的没頭」を見出すことができるのである。

具体的には、彼らに活動の終盤でその日の終了を促す際に、彫刻の継続を望む声と共に、時間が「瞬時」に流れたように思えるといった主観的時間の発現に関する指摘が随所に見られるのである。さらに、制作に没頭しうる自分自身の予想以上の忍耐力に自ら驚嘆している様態もしばしば確認することができる。

ところで、筆者は十数名の学生達に、「こっぱ人形」と「ギニョール」の制作の機会を複数回にわたり与え、年間を通じて継続的に彫刻を実施する「練習」の反復を促した。「練習」とは技術の錬磨を第一義的な目的とするのではなく、それを通して練習者が内的自由に至ることがボルノーにより要請されていることは既述の通りであるが、不断の「練習」の意義を彼らの様態に見出すことができたように思われる。すなわち、芸術文化との対峙を通して、制作技法の向上を自覚するというよりはむしろ、創造の過程において発現する、対象世界への集中や沈着という経験が自己形成に寄与するものであることへの気づきが彼らにもたらされたのである。

たとえば、当初、彫刻の技法の欠如に悩んでいたある学生は、一作目の完成度が低いことに悔しさを抱いた様子であったが、二作目の制作において時間との関わり方に関する考え方を変容させ、自己充実に至ったと述懐した。まさにボルノーが「人が自分自身の能力の無力さと苦悶する」過程が「練習」の意義であることを示している³⁹ように、当該学生は自分自身の彫刻技法の欠如が引き起こす制作への嫌悪を、二作目の制作を経ることにより、対象世界にじっくりと対峙しうる自己肯定に転化させたのである。換言すれば、木彫人形制作の継続性による「練習」を経て、当該学生は彫刻技術の錬磨ではなく、むしろ、自分自身が対象世界と関わる際の真の向き合い方に気づいたという点で、まさに練習の継続性において、「解き放たれた状態」⁴⁰として内的自由を得たことになる。

こうした解き放ちをめぐり、継続的な木彫人形の制作において、彼らから「穏やかな気持ち」になったとの声が聞かれたことにも注目したい。制

作過程で得られる平穏さは、木のぬくもりや自分の掌の上でできあがっていく擬似的な人間の姿をめぐる、木彫人形制作に固有の情緒的な反応と受け止めることができるものの、一方では、彫刻という行為に内在する「練習」の時間性が練習者の平穏を導いたと考えることもできるのである。すなわち、ボルノーが「放下」について論じる際、人間が緊張と開放の狭間にある時間と同調して生活する中で、時の流れに静かに身を任せる際に得られる「平穏」(Ruhe)⁴¹が「練習」を通して学生達にも共有されていたことになる。

7. 結びにかえて

ボルノーは「練習」の本質を、純粋な完成に至るような工芸や手仕事の製作ではなくむしろ、「未知のもの、いままでに形成されなかったもの」⁴²としての偉大な芸術作品の創作の中に見出そうとしていた。芸術家はその創作に際して不断の「練習」を重ねるが、こうした忍耐強い創作過程における「放下」を通して得られる喜びは、現代の青年達にも共有されたといつてよいであろう。

本稿では、学び手が学びの過程で対象世界との対峙において苦闘しつつ、やがて内的自由を見出す「練習」について扱うことを通して、彼らが「さまざまな時間」に出会い、それを身体化していくことの意義についての考察の端緒を得た。前時代的とも捉えられる「練習」の教育学的意義を改めて問うこととなったが、学校教育において希薄化し、親和性が低下しつつあるさまざまな時間性に学び手が出会い、それらを身体化することで、世界との関わり方に何らかの内的自由を見出すことができるような「新たな時間」のあり方を検討することを今後の課題としていきたいと考える。

最後に、筆者の教育活動において、彫刻に没頭する学生達の息遣いが聞こえるかのようなであった教室内の静謐が想起される。学校教育における静謐は、一般的には、静穏な学習環境の保持のための道徳的行為の結果とし

て位置づけられている。これに対して、「練習」を契機とした「放下」としての静謐は、極めて内発的なものであり、また、個人的な内的自由に関連するものであるといえるだろう。こうした「放下」を経験した者のみが、保育者や教師となった際に、教育空間でそれぞれに発現する子ども達の内発的静謐を保障することができると思われる。高等教育機関における教員養成が上記のような観点も併せ持ちながらなされることを期待したいのである。

謝辞：本稿は令和4年度白鷗大学教育科学研究所特別研究費の助成を受けて執筆したものである。ここに記して深謝したい。

註

- 1 内山節『時間についての十二章－哲学における時間の問題－』岩波書店 2001年 282頁。
- 2 同書 282頁。
- 3 鶴見俊輔『神話的時間』熊本子どもの本の研究会 1995年。
- 4 内山前掲書 284－285頁。
- 5 Otto Friedrich Bollnow: Vom Geist des Übens. Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrungen. Hans-Ulrich Lessing, Ursula Boelhaue (Hrsg.), Gudrun Kühne-Bertram (Hrsg.), Frithjof Rodi (Hrsg.) Otto Friedrich Bollnow: Schriften BandIX, Sprache und Erziehung – Das Verhältnis zur Zeit – Vom Geist des Übens, Königshausen & Neumann, Würzburg 2017. O.F.ボルノウ著 岡本英明監訳『練習の精神：教授法上の基本的経験への再考』北樹出版 2009年。
- 6 ebd. S.267.
- 7 ebd. S.267.
- 8 ebd. S.267.
- 9 ebd. S.270.
- 10 ebd. S.271.
- 11 ebd. S.271.
- 12 ebd. S.271.
- 13 ebd. S.268.
- 14 ebd. S.275.
- 15 ebd. S.267.
- 16 ebd. S.350.
- 17 ebd. S.359.

- 18 ebd. S.298.
- 19 ebd. S.299.
- 20 ebd. S.299.
- 21 有馬知江美「人間形成における子どもが過ごす時間の意義について」『関東教育学会紀要』第30号 関東教育学会 2003年 4頁。
- 22 O. F. Bollnow, a. a. O. S.371.
- 23 ebd. S.353.
- 24 ebd. S.333. 井上遥も「『練習の精神』における「放下」を軸としたボルノー教育人間学における「身体性」の契機についての一考察」（白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター『研究年報』No.23 2018年。）で、「放下」における人間の「身体」と「心」の関連性について論考している。
- 25 Otto Friedrich Bollnow: Das Verhältnis zur Zeit. Hans-Ulrich Lessing, Ursula Boelhaue (Hrsg.), Gudrun Kühne-Bertram (Hrsg.), Frithjof Rodi (Hrsg.) Otto Friedrich Bollnow: Schriften BandIX, Sprache und Erziehung – Das Verhältnis zur Zeit – Vom Geist des Übens, Königshausen & Neumann, Würzburg 2017. S.186. O.F.ボルノー著 森田孝訳『時へのかかわり 時間の人間学的考察』川島書店1975年。
- 26 O. F. Bollnow, a. a. O. Vom Geist des Übens. Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrungen. S.335
- 27 O. F. Bollnow, a. a. O. Das Verhältnis zur Zeit. S.186.
- 28 O. F. Bollnow, a. a. O. Vom Geist des Übens. Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrungen. S.313
- 29 O. F. Bollnow, a. a. O. Das Verhältnis zur Zeit. S.182.
- 30 ebd. S.185.
- 31 ebd. S.187.
- 32 O. F. Bollnow, a. a. O. Vom Geist des Übens. Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrungen. S.335.
- 33 ebd. S.360–361.
- 34 有馬前掲論文 4頁。
- 35 大学生有志を対象とした「こっば人形初心者講習会」（2019年）、こっば人形・ギニョール制作講習（2022年）、科目「ゼミナール」（2020年～）、「子どもの生活と遊びD」（2021年～）等で木彫人形制作の機会を提供した。
- 36 O. F. Bollnow, a. a. O. Vom Geist des Übens. Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrungen. S.353.
- 37 有馬知江美「農民美術『木片人形』製作における精神的価値について—その歴史的遡及と今後の普及に向けて—」日本人形玩具学会『人形玩具研究 かたち・あそび』第28号 2018年。
- 38 「ギニョール」も「木片人形」等の木彫風俗人形と同様に、農民美術運動において大正15（1926）年に千葉県君津郡における農民美術講習会を経て農村青年達によって制作されたものである。その制作の経緯や農村青年達に与えた教育的意義については拙稿を参照されたい。（有馬知江美「農民美術『ギニョール』に関する史的考察—その製作の経緯と意義について—」日本人形玩具学会『人形玩具研究 かたち・

有 馬 知江美

あそび』第29号 2019年。)

39 O. F. Bollnow, a. a. O. Vom Geist des Übens. Eine Rückbesinnung auf elementare didaktische Erfahrungen. S.349.

40 ebd. S.328.

41 ebd. S.328.

42 ebd. S.350.